

飼料用米生産・利用拡大シンポジウム開催

農水省は4月15日、16日に飼料用米生産・利用拡大シンポジウムを開催した。農水省・農政局・農研機構・都道府県・JA・商社・資材メーカー・飼料メーカー・報道機関より北海道から沖縄県まで全国600名程の参加があり初日では本省7階講堂に入りきれなく別部屋でテレビモニターを使って立ち見が出たほどの盛況ぶりであった。開会挨拶では小泉副大臣が挨拶、その次に皆川事務次官による飼料用米についての取組説明、途中より国会審議の公務の合間を縫って林大臣が挨拶に登壇される等、国会以外で農水トップ3が揃って挨拶する場はなかったのではないかとというくらい、省をあげての熱の入ったシンポジウムであった。それも「新食料・農業・農村基本計画」が3月31日に閣議決定され、その中で飼料用米の生産を10年後の生産努力目標として110万トンまで拡大し、その達成に向けて水田活用の直接支払交付金の支援を行うことをPRし、現場に周知徹底したい表れといえる。



前回の民主党が政権与党時代に策定した食料・農業・農村基本計画では食料自給率目標値が高すぎたとして今回の計画では実現可能な目標数値として設定したとのこと。この飼料用米の生産目標も努力目標ではない実現可能な数値として設定したと力説された。また、関連業界や生産者の一番の関心事である「この制度がいつまで継続するのか？」という点について、補助金は単年度予算のベースであるという問題はあるとした上でのコメントだが、農水省は、毎年8万トンの消費が減少する中で水田の利活用を考えた場合に全国で取り組めて且つ確実な国内の潜在需要があるものとして飼料用米以外にはない事を強調し、農水省としても是が非でも予算獲得していく覚悟のもと、このイベントを開催したという具体的で分かりやすい言葉が述べられたのは大きい。また、林大臣の挨拶では食糧有事に備えても飼料用米が主食用に転換できることも可能として一石二鳥ならぬ三鳥にもなるといったコメントがあり、これも水田利活用し且つ国産の飼料原料供給率を上げるといったことで国民の理解を得ていく考えが表れた内容のある発言であった。

シンポジウム初日は農水省以外にもJA関係、飼料工業会の取組方針が説明された。既に新聞で報道されているが、JA全農はグループ飼料会社を中心に60万トンを受け入れる事を可能として、流通・製造対策については保管・中継基地の確保、ントリーエレベーターの活用を順次進めていくとした。また、生産現場にあった品種選定をすべく東北・営農技術センター（平塚）・石垣島での開発拠点を設けて推進していくとしている。生産現場での優良取組事例では農事組合法人での飼料用水稲栽培面積拡大や生活クラブ生協等での飼料用米使用した生産物の消費等での耕畜連携事例が紹介された。

2日目では農研機構からの飼料用米の各畜種ごとの最大給餌量の試験データと目安の発表、新潟県の試験場からは産地生産者との取り組み実例が紹介され内容の濃いものとなった。肥料や栽培に関するトピックスとしては生産コストを下げるための支援活動、栽培地域に合った適切な品種選定が重要という事、熊本県からは飼料米の収量を上げる取組のなかで省力という観点から基肥一発の専用銘柄の立ち上げが必要ということがあがった。また、質問の中では問題提起として今後飼料用米で生産された畜産物のPR方法で国産飼料用米を利用した場合の表示方法についても今後議論が必要ではないかという意見があった。これから各地域において飼料用米生産に対する具体的な課題が出てくると思われるが課題を克服しながら水田における地域の生産が維持出来て且つ地元での利益循環が出来ればこの推進方針がうまくいくことを望まずにはいられない。

「京山ソーラーグリーンパーク」植物工場

当社特約店の両備ホールディングス株式会社(岡山県岡山市)の関連会社であるソレックス株式会社が運営する両備植物工場「京山ソーラーグリーンパーク」を見学し、両備経営サポートカンパニー経営戦略本部・アグリビジネス推進部前田課長のご案内で施設の説明を受けた。

同社は集光型太陽光発電光と完全人口光(蛍光灯・LED)の併用型と完全人口光の二種類の施設でレタス・クレソン・ルッコラ等の野菜を無菌化し、室温や湿度が一定に保たれた室内環境で、水耕栽培により700~800株/日を生産、安定的な栽培技術を確立している。集光型太陽光発電システムは、独立行政法人「産業技術総合研究所」と共同で2011年1月より稼働。アメリカ・ドイツ・日本のメーカーのシステムを実証実験しており、データはアメリカ・デンバーと同研究所に送信され検証しているとの事で、人工衛星に搭載される機器と同等のため1基1億円弱のコストがかかっているとの事であった。前田課長によると、植物工場が成功するにはいかにコスト削減するかがカギだと言う。同社の場合、岡山駅より数キロの好立地でありながら、休遊地にあった築50年の建物を利用しており、ランニングコストを抑えている。また、大手企業が参入するには原価管理と販路の確保が難しい問題を解決しなければならないだろうとの見解であった。

同社の野菜の販売先は、ANAのファースト・ビジネスクラスの機内食向けが大半で、他にホテルにも出荷している。同社は自社にて植物工場を運営しているが、同社が開発したプラント「やさい蔵」の販売も手がけておられる。4年前に見学した際には、野菜を覆うシートは無かったが、試行錯誤を繰り返し現在設置され、光を効率的に野菜に当てる事ができ、以前より15~20%収穫量が増えた模様。但し、発熱量を逃がすための工夫がなされている。

現在、人口光は蛍光灯が主力だが、今後はLEDの単価が安価になってきているので、LEDを増やして行く方針。また、LEDの利点は発熱量が少ないため、夏場の空調のコスト削減が期待でき、生産設備が写真のようにスペースを確保しなければならないが、LEDであれば省スペースの栽培が可能となり、株数も増やすことができる模様。矢野課長代理によると、肥料については同社規模の場合、殆ど使用しなくても栽培できる。但し、同社の植物工場は先進的な運営をしており、定期的な交流は有益であると考えているとの事だった。



見学の最後に、野菜を試食させて頂いた。一日前に収穫して冷蔵庫で予冷してあった野菜であったが、シャキ

シャキ新鮮さもさることながら、同社野菜のコンセプトである栄養価は維持しながら、野菜特有の青臭さがなく大変美味しかった。東日本大震災以降、植物工場が各地に建設されたが、土耕とは違うマーケットはニッチながら存在しており、今後の動向に注目して行きたい。見学をアレンジして頂いた清和肥料工業株岡山営業所矢野課長代理に感謝申し上げます。(大阪支店/川崎)

この春の日照不足は野菜の生育に深刻な影響を及ぼしています。天気の悪い日が続くと気分がスッキリしないので、晴れた日に外を歩くと陽射しと風が気持ちよく感じます。大型連休は晴天に恵まれてリフレッシュできるといいですね。

編集事務局：南部、助川

